

## 「バステイド研究の現在 —中世南フランスの新設集落を巡って—」

加藤 玄

本報告は2部から構成される。第1部は13世紀以降中世南フランスに多く建設／設立された「バステイド bastide」と総称される集落に関する研究史の概観であり、第2部は今年9月に報告者が建築史研究者と共同で行った現地調査の中間報告である。なお、報告の際にレジュメ等の資料を配布した他、プロジェクトが設置された会場の利点を活かし、Microsoft PowerPoint を使用した。

第1部では、現在までの研究史を3期に分類した。まず、19世紀末までを第1期として、バステイドのイメージが形成される過程をF. Pujolの研究に依拠しながら概観した。バステイドを定義する際には、①パレージュ（領主共同契約）②フランシーズ証書（解放証書）・特権証書③新たな建設（空白地からの建設）④計画された町並み⑤防備施設の存在、などが要素として挙げられることが多いが、これは19世紀までに形成されたイメージによるところが大きい。17-18世紀におけるイメージの萌芽期、19世紀前半におけるイメージの錬成期を経て、1850-1880年にイメージが大衆化・通俗化され、以後の研究を規定する強い影響力を持った。その後、地方史レベルで若干の研究が見られるが、全般的に研究は停滞していた。

第2期は1940年代-1980年代である。バステイドが研究対象として「再発見」された時期であり、バステイド研究の「脱イメージ化」の過程でもある。法的側面からトゥルーズ伯による設立の具体相を詳細に検討したO. de Saint-Blanquat、トポグラフィ（プラン、広場、アーケード）を重視する都市計画 urbanisme の視点からのP. Lavedainらの研究も重要であるが、中でもCh. Higounetの業績が際だっている。従来の文書史料の検討に加え、地理学考古学的手法を取り入れた彼の諸研究によりバステイドという現象の地理的年代的な基本的枠組みが確定し、機能や性格を巡る議論が活発に行われた。バステイドは地域史研究の中に位置付けられることになり、モノグラフィが蓄積された。以上の研究を踏まえて、1980年代末に再総合の試みがなされた。建築史の観点からA. LauretやR. Malebrancheはトポグラフィの多様性を強調した。1987年には『バステイドの恒常性と現状』と題され、ドイツ・ポーランド・イタリアの歴史家・建築家らが参加した国際研究集会が開催された。比較史と地域史の研究対象として相対化・非特権化されつつもバステイドの具体相が解明されていった。ただし、バステイドを定義する試みは放棄され、また、空間構成については都市史の枠組みでの議論に留まり、周辺の農業空間への視点は欠如していた。

1990年代以降の研究動向を第3期とするならば、第2期と共通する特徴の内、①地域史研究②地理学考古学的手法の利用、という側面がより強くなった時期として位置づけられる。特定の地域の定住史を精緻に考察した博士論文が提出され、地方研究集会報告集が相次いで出版される一方で、十分に深められているとは言えないが、地理情報システム（GIS = Geographical Information System）、年輪年代測定法 dendrochronologie がバステイド分析に導入されつつある。また、ガロ・ローマ期耕地研究でG. Chouquerらが練り上げた景観形態分析の手法をC. Lavigneがバステイド周辺の耕地分析に適用して考察を試みたことは注目に値する。

今後の展望としては、バステイドの物理的空間への視点、特に都市空間と農村空間を接合する方向へと議論が進んでいくと予想される。また、そうした視点の拡大・多様化に伴い、新しい技術・研究手法が必要とされ、その模索が続けられるであろうし、歴史学・地理学・考古学・建築学の専門家共同による学際的研究及び国際的協力の必要性がますます強くなっていくものと思われる。

第2部では現地で撮影した写真の一部を提示しつつ、簡単な報告を行った。調査期間は2005年9月13—25日、対象バステイドはSauveterre-de-Rouergue（Aveyron県）、Monflanquin（Lot-et-Garonne県）、Monpazier（Dordogne県）の三箇所であり、①都市プラン・都市断面・街区調査②建造物調査・家屋内部の実測③文献収集④聞き取り、が主な調査内容であった。本調査の結果は近く刊行予定である。